
ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ!

普通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ！

【Nコード】

N9436Y

【作者名】

普通

【あらすじ】

ありがちなゼロ魔にオリ主転生モノ。本人は主人公になどなりたくないけど、うっかり首を突っ込んで途中で引けなくなるタイプ。原作のことは遠い記憶の彼方で、臆げな記憶を頼りに、原作どおりになるようしようと頑張れば頑張る程、明後日の方向に事態は進んでゆく。主人公の座右の銘は「明日から頑張る。」

チート具合はテラチートという言葉も生温いぐらいのチートなのでドン引きするかもしれませぬ。さらに基本的にオリ設定の嵐です。こんな地雷いっぱいのはずですが読んでくれる人がいたら嬉しいで

५.

普通に原作開始

ここはハルケギニアはトリステイン、由緒正しい貴族の子弟の魔法の学舎、トリステイン魔法学院。

今日は2年生に進むために必須である、春の使い魔召喚の儀式が執り行われている最中です。

私は所謂ところの転生者とかいうもので、なんと驚き、前世の記憶を持っていきます。その前世の記憶の中では、この世界はゼロの使い魔というライトノベルとして登場していました。

ここは魔法を使えるメイジという人たちが存在し、中世レベルの文明で、貴族が絶大な力で平民を支配し、亜人や幻獣が跋扈する一級危険世界なのです。それも、私が生まれたトリステインという国は、伝統があるもののちっちゃくて弱っちい国家、それも物語の中では主人公達が活躍しなければ滅んでしまう程です。

私が最初にこの世界が”あの”ハルケギニアだと気づいたときは、貴族の家に生れたことを神に感謝し、もし魔法学院に行つて物語の”ヒロイン”であるルイズ・なんとか・アリエール嬢がいたりしたらどうしよう、と悩んだものです。

もちろんいましたよ、隣のクラスに。神って呪い殺せるんでしょうか？

”原作”の冒険に巻き込まれないよう仮病をでっちあげて、2、3年の間学院を休学しようとも考えましたが、私の家がある以上、ここは物語とは違う平行世界ということになります。もしそのせいで物語どおりに主人公が現れず、ヒロインが覚醒してくれないと、私の国はなくなってしまう、家も潰れてしまいます。

流石に中世レベルの文明で平民暮らしなんてゴメンなので、すごく、

すごく気が進まないのですがヴァリエールさんが伝説の使い魔・ガンダールヴの斎藤を召喚して、伝説の系統・虚無に覚醒するまで影からこっそり見守ることにしました。ええ、見守るだけですとも。

「儀式、次。」

なんかちんまい青髪の少女にクイツとマントを引っ張られたような気がしますが、きつと気のせいです。

「風竜を召喚するなんて、さすがタバサね！ 私も火竜呼べるかしら？」

「きゅいきゅい。」

ウキウキしながら杖をぶんぶん素振りしている褐色肌に赤髪のグラマラスなおねいさんと、独特の啼声をするドラゴンが視界の片隅にいますが、これもきつと目の錯覚でしょう。

物語はこの使い魔召喚の儀式から始まっていますが、よく考えればごく当たり前のことですが、その前に一年間同じ学院で暮しているのですから、関係者にエンカウトするのは当然なのに。

そもそも十年以上前のアニメの内容なんて細かく覚えていないのは当然じゃないですか！ しっかり覚えているのは胸革命バストレボリューションと日野理恵ラジオによく萌えたことぐらいですよ！

私のゴロゴロハルケギニアライフ計画を危険イッパイワクワクハルケギニアアドベンチャーにさせないためにも、頑張らなくては。明日から。

「人生諦めが肝心。」

雪風のように冷たく鋭い言葉で私の現実逃避を一刀両断する青髪の少女に促され、私は広場の中央に進み出ます。

「我が名は、エドモン・ディチロ、五つの力を司る五角形^{ペンタゴン}、我に相
応しい使い魔を召喚せよ。」

銀色の人間大の鏡のような扉^{ゲート}が宙に浮かぶ。

私の中で運命の扉がギシギシ音を立てながら開いた、そんな気がし
た。

普通の使い魔(だったらよかったのに)

銀色の鏡から現れたのは、散切りの黒髪に神経質そうな目をした、細身の中年の男性だった。

男は白のマントらしきものを着けていたので、ギリギリ貴族に見えなくもないが、とにかく身なりからして怪しいのだ。

ゴツイ竜革らしきブーツを履き、真つ黒なゴム製の分厚いエプロンをかけ、目元を広く覆う大きな眼鏡をかけている。極めつけは、貴族の象徴たるマントには小物を入れるポケットのようなものが設けられている。それも、いきなり召喚されたにもかかわらず、男はそれを気にした様子もなく、手に持っていたノートにペンで何かを書き込み続けている。

儀式を監督する立場であり、立会人でもあるコルベル教諭も、先ほどから男の振る舞いに呆然としている。すっかり静まり返ってしまった広場には、風の音と男がペンを走らせる音が妙に大きく響く。そんな緊張の糸を切るかのように、再起動を果たしたコルベル教諭が男に声をかけようと一歩を踏み出したところで、機先を制するように男はノートから顔を上げ、姿勢を正して口を開く。

「久しいな。」

その言葉は、ハッキリと私に向けられたものだった。なぜか、コルベル教諭の肩が一瞬ビクリと跳ねたように見えたが、私は気にせず男に返事をする。

「はい、父上。一年ぶりになります。父上は相も変わらず不健康そうな生活をしていらっしゃるようで何よりです。」

「ふん、貴様とて大差は無いだろう。休みにも顔を見せないで何をやっているのかと思えば、レポート転移魔法でも使えるようになったのか？」

私が召喚した男の名はトウーサン・デイチロ、私の父であり、イチロ伯爵家現当主殿である。

昨年の長期休暇に帰省しなかったことに未だ御立腹なのか、言葉が刺々しい。

「いいえ、ただの召喚ですよ。サモン・サーヴァント全く、何がどうなっているのやら。

是非解剖して調べさせて頂けませんかね。」

「ふむ、魅力的な提案だが、丁重に断らせてもらおう。使い魔のルーンは心臓が止まると消えてしまうらしいからな、やるだけ無駄だ。」

「ちつ。」

私達親子の心暖まるやりとりの中てられたのか、周りがまた空気になっている。そんな空気を打ち壊すかのように、明るいつい若い女性の声が割り込む。

「へいへーい、今日の主役のこの私、スーパーキュートなアンブレちゃんを無視しないでください。いい加減私も怒っちゃいますよー？」

私の使い魔らしき奴は、とうとうポンポンという擬音を態々魔法で宙に描いたりし始めている。

いや、先ほどからピカピカ発光してしきりに存在をアピールしていたのだが、親子そろって無視していたのだ。

父の右手に納まっているペンは、その名をランブレという。イチロ家に伝わる由緒正しいインテリジェンス・スタッフであり、性格はあんなんだが、一応、代タイチロ家の当主の杖を務めているのだ。

父と私は疲れたように額に手をやり、同時に溜息をつく。しかし私は、父の口元が一瞬ニヤけるのを見逃さなかった。ランブレを厄介払いできるのが其れほどまでに嬉しいらしい。その気持ちはよくわかる。

「さあさあさあ、私達の熱いヴェーゼを皆さんに見せつけてやりましょう！ エド君のファースト・キスを散らすのがアンブレちゃんになるなんて予想外の展開ですが、ダイジヨブ！ ミネットちゃんには内緒にしておいてあげますから！」

この性格さえ無ければ優秀な杖なのに、こいつを作った奴は何を考えてこんな性格にしたのか。ただでさえ原作開始を思うと今日から憂鬱なのに、コイツの相手が加わるなんて。

何時も暇を持余しているランブレのことだから、これからの数々のイベントに出会うたびに事態を面白可笑しくする方向に尽力するに違いない。さすがにトリステインが滅ぶような場面では遊ばないと思うが、平穏な日常からは物凄い勢いで遠ざかっている気がする。悟りの境地ってこんな感じなのかな、と穏やかな笑みを浮かべながら、私は投槍にコントラクト・サーヴァントを唱えてランブレにキスをした。

「内緒も何も、ミネットは今年から学「しゅごおい、エド君の熱いカ」のがアンブレちゃんのナカに入ってくるう」院に通っているぞ？
明日には知れてるんじゃないか？」

「は？」

「貴様まだミネットと顔を合わせてないのか？ もう入寮して2週間経っている筈だぞ？」

父上の言葉に一瞬で現実引き戻される。ハトコであり私の婚約者でもあるミネット・ド・シロー・ジロは、学院は通わない予定だったはず。というか、私が学院を卒業と同時に入籍というスケジュールまで決まっていたはずが、一体どうなっているのか。
原作大冒険イベントにあの御転婆な少女の世話まで加わるなんて悪夢のような未来予想図に、溜息が零れる。

「ちょっと父上とOHANASHIがありますので、今日はここで早退させて頂きます。」

再び固まったまま唾然としているコルベール教諭にそう断り、父を連れて立ち去るのだった。

あれ？ 今日の目的ってヴァリエールさんがちゃんと斉藤君を召喚できるか確認することじゃなかったっけ？

普通の婚約者 前編

父とのOHANASHIは流れてしまった。というか、父の杖は私が貰ってしまったのでそもそも勝負が成り立たない。その父は隣で使い魔を通して王都トリスタニアまで迎いを出させ、さっさと帰る算段をつけている。将来の義理の娘も居るのだし、顔ぐらい見せていっても良いのに、そんな気は更々ないようだ。

父を厩舎まで送った別れを告げた後に、私は真っ直ぐ一年生の授業が執り行われている教室へと向かった。どうせヴァリエールさんのサモンサーヴァントで今日の授業は殆ど潰れるのだ、少しぐらい寄り道しても問題ないだろう。

一年の教室の前に着いた時は、丁度今日の授業が終わったところのようで、教科書や筆記具を抱えた、まだ茶色いマントの一年生達を教室の扉からぞろぞろと吐き出している。

その中に、ダークブロンドのポニーテールを腰まで伸ばした後姿を見つける。多分、あれがミネットだろう。トリステインではあそこまで暗い色は珍しい。一年前の冬に見た時よりも若干色合いが濃くなっているが、うちの連中ならばまだ薄いくらいだ。

「ミネット。」

「お兄様、お久しゅうございます。」

私の呼びかけに答えて小柄な少女が優雅に振り向き、スカートの隅を摘まみつつ澄んだ声色で挨拶を返す。釣り目がちの漆黒の瞳にキラツとした眉、そして、その鋭さを打ち消すような優しい微笑みを浮かべた少女がそこにいた。

「だ、誰だてめえ!？」

思わず言葉遣いが乱暴になってしまった。だが、私は今、何らかのスタンド攻撃を受けているッ！ 姿形は一年前のミネットをそのまま拡大コピーした様にそっくりだが、キャラが可笑しすぎる。断じてうちの婚約者殿は優しい微笑を浮かべて御機嫌ようとか挨拶するタイプの人間じゃねえ。

その証拠に、さっきはミネットには内緒と言いながら、実際に本人に会ったら無いこと無いこと吹き込む気だったランブレも、あまりのことに完全にフリーズしている。

そうだ、この子、食堂とかで何度か見掛けたことがあった。誰かに似ていると思っていたんだが、キャラが違い過ぎて良く似た別人だと思っただけだったんだ。

混乱で完全にフリーズしている私に業を煮やしたのか、ミネット(？)は徐に杖を取り出すと、呪文を唱え、正気に戻った時には私達は窓から飛び出していた。この魔法行使は覚えがある、やはり間違はなく、私をお姫様抱っこしてニヤついているのは真正正銘ミネットだ。

背後から上がるキヤーという黄色い歓声は極力気にしないことにした。

五階の寮塔の部屋に窓から入る。ここがどうやらミネットの部屋らしい。デカイ氷室に、窓まで続いているダクト。刃物や工具が詰まっているラックに、大理石、木、金属と三種類も用意されている、一見無駄のようにも見える作業台。その上には魔法のバーナーとサラマンダー革のゴツイ手袋が無造作に置いてある。まるで自分の部

屋に帰ってきたような気分だ。寮室をこんな風に改造するのはうちの人間ぐらいだろう。少なくとも一般的な女の子の暮らす部屋ではない。

「で、お兄様ってどこの誰だ。熱でもあるのか？」

「お兄ちゃんって呼ぶとセンパイが喜ぶってお義母様が言ってたんだケド。」

心外だという顔をしてぷうっとふくれるミネツトさん。婚約者として張り切ってくれるのは嬉しいが、お前、方向性はそれでいいのか？ それよりも母上クロエさんミネツトに何吹き込んでんすか！。どうやら私は母に妹萌えだと認識されているらしい。確かに妹は猫可愛がりしているが、断じて妹萌えではない、はず。

「ふい〜。今日も疲れた。肩がこるぜい。」

さっきの雰囲気とは打って変わって、仕事帰りのおじさんのようにぐるぐる腕を回しながらポスンとベッドに腰掛けるミネツト。

「はっ、夢か。」

「夢じゃねーよ、センパイ。まあ新学期早々にちよつとやらかして、今さら猫脱げねーんだよ。ほら、イトウだっけ？ 何かにつけてはイチイチ風が最強とか言う教師知ってる？」

「ギター先生だ。ここの教師陣はだいたい皆、自分の系統こそが至高だと思っているが、声高に主張して憚らないのは彼ぐらいのものだ。まあ、あれでも偏在が使えるんだからそうなるのもしょうがないとは思うが。」

「でさ、うちのクラスの娘がネチネチいじめられて泣かされちゃつてさ、つい、ね？ 学生相手だからといって、あんまり舐めた授業していると足元掬われますよって、それとなく注意を促してみたのよ。」

「ね？ じゃねーよ！ この間の風系統の授業が急遽無くなったのお前のせいだったのか。それとなくって意味、ちゃんと解ってるのか？」

「まあその件でクラスのヒーローみたいになっちゃって、庇った娘からはなぜかキラキラした瞳で御姉様とか呼ばれるようになってさ。いまさら地がこんななんだって言い出せねーんだよ。まあ、アタシの話はこれぐらいでいいじゃん。それよりセンパイたち二年生は今日は使い魔召喚の儀式だったんだろ？ こんなとこで油売ってていいの？」

「これぐらいって、はあ、入学一月目でこれが。なんだかつつけばもつと出てきそうだな。」

あからさまに話を逸らされたが、まあ、人間知らない方がいいことって世の中あるよな、うん。学院に入学した直後、オールド・オスマン直々に呼び出され、君はくれぐれも自重するようにと必死に釘を刺された理由が、今さらながらなんとなく察せられた。きつとうちのOBの連中はこんなのばかりだったんだろう。

私は知らなかったんです！ よし、理論武装完了。何かあったら全部父上に丸投げしよう。

「使い魔召喚の儀式は長くなりそうだから自主休講になったんだよ。それで私の使い魔だが、」

「呼ばれて、飛び出て、ジャカジャカジャーン！ アンブレちゃん登場！」

勝手に持って行った人の精神力で、これでもかという程の魔法で光る星を散らしながらランブレが名乗りを上げる。

「お義父様の杖？」

「そのとおり。今日からはエド君の杖兼使い魔兼終生の伴侶ですけどね」

「伴侶って間違っちゃいないが、はあ。」

「あれれ、反応薄いですよー、ミネトちゃん？ もっと、こう、キーツ悔しい、ドロボー猫め！ みたいな反応してくれないとアンブレちゃん楽しくありません。」

「や、だってランブレ、その、杖じゃん、なあ？」

「くう、それは気にしたら負けです。」

「それに齡4500歳のババアだし。」

「アンブレちゃんは永遠の十七歳なんですー！」

そう叫ぶと、ランブレは私の精神力を使ってフライの魔法で窓から飛び出して行ってしまった。つーか、ミネトも杖の戯言ぐらい聞き流せよ。変なところで負けず嫌いなのは変わらないな。あつという間に見えなくなる新しい相棒を見送りながら、きつと明日には『

怪奇、空飛ぶペン』なんて噂が流れるんだろうなとボンヤリと考えた。

普通の婚約者 前編（後書き）

メインのオリキャラはこの3人（？）でひとまず終了です。次回はバトルパートの予定。

主人公の親類縁者はチヨイ役や番外編があれば出てくるかもしれませんが、何時になることやら。

設定資料集と登場人物紹介を整理していたらいつのまにか40KBを超えていたので、全部出てくることは多分ないですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9436y/>

ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ!

2011年12月5日23時52分発行